

聖書：ヤコブ 5：16～20

説教題：迷いの道から引き戻す

日時：2017年12月31日（朝拝）

7月から学んで来たヤコブの手紙も、ちょうど今年最後の聖日のこの日に結びの箇所を読むこととなりました。ヤコブは13節からこの手紙を結ぶにあたって、祈りの大切さを改めて強調しています。14節では、病気の人は長老たちを招いて祈ってもらいなさいと言いました。15節では「信仰による祈りは、病む人を回復させます」とも言いました。これらの勧めに続いて、16節では「ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい」と言われています。まずここから分かることは、祈りは長老たちだけのものではないということです。祈りは誰でもできます。そして祈りには力があります。ですから長老に限らず一人一人がお互いのために祈り、とりなすようにとされています。

しかし具体的に言われていることは何なのでしょう。「あなたがたは互いに罪を言い表し」とはどうすることなのでしょう。これはある人たちがそう取るように、互いに罪の告白をし合う集会を開いてとりなしの祈りをするということなのでしょう。ある人たちはここをそのように読んで実践しました。特に歴史の中では小グループを作り、その小グループの中でこのようにすることをルールとして取り組んだ人たちがいました。私も似たような経験をしたことがあります。ある集まりで、その会のリーダーが、このヤコブ書5章16節を引用した後で、「それではこれから互いに悔い改めの祈り、罪の告白の祈りをしましょう。導かれる人から自由に祈ってください。」と言います。そしてある人からお祈りが始まりますが、こちらがいつまでもそれをしないですとさすがに気まずくなって来ます。そして「何か罪を告白しなければダメなんだろうか。色んな人が聞いている前で、いきなり罪を告白しようと言われても・・・」と思うのです。あるいは私はある集会である人がいきなり前に出て来て、このヤコブ書の御言葉の通り、私は自分の罪を告白すると言って語り始めるのを聞いたことがあります。とても違和感のある内容でしたが、それを聞いたある人は「アーメン！」と言って、まるでそうすることが模範的であるかのようなコメントをしました。そのようにお互いに自分の罪をオープンに告白し合え！とこの御言葉は語っているのでしょうか。

この16節は前の15節とつながっています。15節で述べられたことは、病気と罪の関

係についてでした。15 節後半に「また、もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます」とありましたが、「もし」という言葉がつけられているように、ヤコブはある人の病気の背後には必ず何らかの罪が関係していると言っているわけではありません。イエス様もヨハネの福音書 9 章の生まれつき目の見えない盲人のいやしにおいて、そのことを示されました。しかし一方で、ある病にはその人の罪が関係しているという場合もあります。そういう人にとっては、健康の回復も切実な願いですが、その原因となったであろう罪の赦しも切実な問題です。そういう人に対して、祈りは病からの回復ばかりでなく、罪の赦しにおいても力を発揮すると言われました。この流れが 16 節でも継続しています。16 節で「互いに罪を言い表しなさい」と言われ、その目的が「いやされるためです」とあります。この「いやす」という言葉は肉体のいやしにのみ使われる言葉です。ですからここで告白しなさいと言われている罪も、15 節と同じく、ある病気の原因となった罪であることが分かります。

ある罪が原因で病気になったと自覚している人は、自分でも神に祈ると思います。それによって赦しといやしの恵みを受ける場合もあると思います。罪のために病気にかかった人は、必ずその罪を第三者に告白して、その人に祈ってもらわなければ、赦しといやしの恵みは与えられないというルールを決めることには無理があると思います。そういうことをここは言っているわけではありません。そうではなく、ここはこのような悩みと苦境にある人は他の人に自分の罪のことも話し、祈っていただくことを通して、より豊かな神の恵みにあずかることができるということを語っているものだと思います。その人は感じています。自分には罪がある。そのためにこのような状況になった。このことで主に祈っている。しかしなかなか平安と解決をいただくことができない。その人はその状態に放置されるしかないのかというとそうではない。その人は信頼できる人に話して祈ってもらおうと良いのです。14~15 節で見たように、長老たちを招いて祈ってもらっても良いですし、それに限らず、親しい、自分のことを心にかけて、祈ってくれる人に話をし、祈ってもらおうと良い。そのようなともに祈る祈りを通して、神がくださる豊かな導きを期待することができるということです。

ですから 16 節は強制的な命令とか絶対ルールと取るべきではないと思います。そのことは 14 節の「長老たちを招きなさい」という言葉も同じです。病で教会に行けなくなった人は必ず長老たちを招かなければならないのでしょうか。そうしない人は聖書に反する罪を犯しているのでしょうか。そうではないと思います。そうすべきかどうかの

判断は、それぞれに委ねられています。ただここでは、それが神が豊かに働かれる祝福の手段だということが言われているのです。

参考になるものとして、ボンヘッファーが『共に生きる生活』という書で、ヤコブ書 5 章 16 節をもとにして語っている次のような言葉があります。「これらのことはすべてく兄弟の前での告白は、神の律法である」ということを意味しているのであろうか。罪の告白は、律法ではなく、むしろそれは、罪人に対しての神の助けが提供されることである。ある人は、兄弟の前での罪の告白なしにも、神の恵みを通して、確かさと、新しい生命と、十字架と交わりへの道に至ることがありうる。ある人は、赦しと罪の告白に対する疑いを一度も知らないし、神の前における自分だけでの罪の告白において、すべてのものが与えられる、ということもありうるであろう。われわれは、ここでは、それを自分では告白することのできない人のために述べて来たのである。」彼は「罪の告白は、キリスト者の自由の領域の事柄である」と言っています。ただ最後にこうも付け加えます。「しかし、神が与えることを必要と考えたもうた助けを、だれが傷つけることなしに、拒み通そうとするであろうか」と。ですから私たちはこれを無理矢理でもしなければならぬ義務と考えるのではなく、神が与えてくださっている豊かな恵みの手段と考えるのが良いと思います。ヤコブはここで祈りの祝福について述べていますが、こうして互いに祈ること、祈られ、また祈ってあげることの内に神が豊かに働いてくださるといふ祝福について語り、勧めているのです。

そこで彼は続けて「義人の祈りは働くと大きな力があります」と言います。この義人とは特別な聖人のことではなく、キリストを信じて、今や神の前に義と見なされているすべてのクリスチャンを指します。ですからヤコブは 17～18 節でエリヤを取り上げますが、その彼について 17 節で「エリヤは、私たちと同じような人でしたが」と言っています。もちろんエリヤは旧約の大預言者でしたが、そういう人だからその祈りが聞かれたというわけではない。エリヤも私たちと同じ人間、恵みによって義と認められた人です。そんな者たちの祈りがいかに力あるものかということをやコブは言いたいのです。ここで述べられているのは I 列王記 17～18 章に記されていることです。イスラエルを偶像礼拝の罪から立ち返らせるために、エリヤの祈りを通して雨が 3 年 6 か月降らないことが起こり、その後、彼が再び祈ると雨が降り、地はその実を实らせました。これは祈りを通して神はどんなに超自然的みわざをなして下さるかということの実例です。しかし私たちはこれを聞いて、自分の祈りとどう結びつけたら良いのか、戸惑うかもし

れません。これは大昔の話であって、今日ではあまり現実味がない話ではないのかと。しかし本当にそうでしょうか。私たちはしばしば、明日天気が晴れるように導いてくださいとか、今度のピクニックの日に天候が守られるように、台風がそれて行くように助けてくださいなどと祈っているのではないのでしょうか。あるいは自分の病気のため、あるいは他の人の病のため、神に助けてください、癒してくださいと祈っているのではないのでしょうか。だとしたら、このエリヤの祈りとどこが違うでしょう。確かにこのエリヤの祈りはスケールの大きなものです。しかしそのスケールの大きな実例を通して、ヤコブは私たちが今一度、祈りを通して豊かに働く神を見上げて祈るように！と励ましているのです。もちろん祈りは私たちの願いを神に聞いてもらう魔術的手段ではありません。いくら私たちが必死に願っても、しつこく祈っても、神はご自身の目から見て良いと思うものしか与えません。そのことを覚えつつ、またそのような神に信頼しつつ、私たちは祈るのです。エペソ人への手紙 3 章 20 節に「私たちの願うところ、思うところのすべてを超えて、豊かに施すことのできる方」と言われている方を見上げて祈るのです。

さて 19～20 節は最後の結びの言葉となります。ヤコブはここで、真理から迷い出た人が私たちの間にいるなら、その人を連れ戻すこと、迷いの道から引き戻すことを奨励しています。面倒な人、厄介な人の切り捨てではなく、その回復のために仕えることです。ここにヤコブの大切なメッセージがあります。それは自分のことだけではなく、他者のことも顧みるということです。直前の箇所でも、互いのために祈るようにと勧められましたが、この最後の部分でも互いの祝福のために関わるようにと勧められています。ここから改めて教えられることは信仰生活は一人でするものではないということです。それは共同体的なものである。誰かが正しいあり方から外れて行くような時、私たちは自分には直接関係がないとか、面倒だとか、誰かがやってくれるだろう、他の人にしてもらおう、ではなく、それに気づいた者として、まずその人のために祈り、またその人の立ち返りのために労するべきであるということです。

そうすることの意義が 20 節に二つ述べられています。一つは、そのようにする人は「罪人のたましいを死から救い出す」ということです。この「死」とは「永遠の死」のことでしょう。つまり、そのままにすればその人は永遠の死というさばきに至るということです。大変なことです。永遠に取り返しのつかないことです。しかしもしその人に関わり、その人を引き戻すことができたなら、その相手の人の永遠の運命を変えることが

できる。死から救い出すことができる。もちろんそれは神のわざです。しかしその神のわざがなされるために尊く用いられる道具としての働きができるということです。もう一つは「多くの罪をおおう」ということです。これも基本的には一つ目と同じだと思います。ダビデの悔い改めの詩篇である詩篇 32 篇 1 節に「幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。」とあるように、これは罪の赦しを意味する伝統的表現です。私たちも神の前に多くの罪を持つ者です。数え切れないほどの罪を持っています。しかしその多くの罪が、イエス・キリストへの信仰に立つことによってみな覆われる。無罪とされ、義と認められ、永遠のいのちの祝福に入ることができる。私たちはその祝福へと相手の人が導かれるために仕えるということです。

ヤコブはまさにこの目的のもとにこの手紙を書いて来たと言えます。厳しい言葉もたくさんこの手紙にはありましたが、それらはすべて読者たちを迷いの道から引き戻し、死から救い出すためでした。そしてヤコブは最後に、この手紙の読者たちもこの働きを共にするようというアピールをして、この手紙を閉じているのです。これを聞く私たちはこの言葉の前でどうでしょうか。

このヤコブの手紙の最後の御言葉は、主にある多くの兄弟姉妹また働き人たちにチャレンジと励ましを与えて来た御言葉だと思います。この言葉を読む時、その背後にまことの羊飼いイエス様を思い浮かべずにいられません。イエス様はまさに迷い出た羊である私たち一人一人を捜して、真理の牧場へと連れ戻してくださいました。それによって私たちは恐るべき永遠の死とさばきから救い出され、まことのいのちを持つ者にされました。イエス様はそのためにどれほどの労と犠牲をささげてくださいましたことでしょうか。しかし主は、ご自分がそうするだけでなく、その恵みにあずかった私たちも、この働きを共にするようにと招いているのです。そして実際、この御言葉に導かれた多くの信仰の先輩たちの働きを通して、私たち自身、どんなに多くの導きと祝福を受けて来たことでしょうか。自分のことだけでなく、こんな迷い出そうな私のことを心にかけ、陰で祈り、言葉をかけてくださり、関わってくださいました。そのような兄弟姉妹方の祈りと関わりをいただいて今日このように恵みに立っている私たちなのではないでしょうか。その恵みにあずかって来た私たちも、同じように他の兄弟姉妹を心にかけ、その救いのために心配り、仕える働きをするようにとここで語りかけられているのではないのでしょうか。

そうする時、私たちはその人を死から救い出し、また多くの罪をおおう者とされます。

これは永遠の価値を持つことです。いつまでも残るものです。そのようにするならやがて私たちはその人たちに大いに感謝されるでしょう。天国でその人の家に迎え入れられて永遠の交わりをするでしょう。そして何よりもこれは神に喜ばれ、神に賞賛されることです。ヤコブは迫害によって散らされ、試練の中にあつた信者たちにこの手紙を書き、最後に互いの益のために心配り、仕えて歩むようにとの勧めを語りました。私たちも状況は異なるとは言え、様々な戦いと試練の中にある者たちです。その私たちもヤコブの言葉に従って、自分のことだけではなく、他の兄弟姉妹のことも心にかけて、その助けとなるという使命に歩みたいと思います。ヤコブの手紙を学んで、自分がここに書いてあることを行うだけでなく、この最後のメッセージにも従って、神の救いの働きに参加させていただき光栄に歩みたいと思います。「罪人を迷いの道から引き戻す者は、罪人のたましいを死から救い出し、また、多くの罪をおおうのだということを、あなたがたは知っていなさい。」(5:20)